

関連イベント

* 申込方法やイベントの最新情報は、当館ホームページをご覧ください。▶



東根アートプロジェクト2025「どいかやさんとつくる、ひとつだけの絵本」

絵本作家・どいかやさんといっしょに、参加者それぞれの「オリジナル・チリとチリ絵本」をつくります。つくった絵本は展覧会会期中、まなびあテラスでご覧いただけます。

日時 | 4月25日(土) こどもの部(小学生~中学生) | 10:30-12:00
おとなの部(高校生以上~大人) | 14:00-15:30

会場 | まなびあテラス 講座室 定員 | 各回15名

*参加無料(要展覧会チケット)・要事前申込(2026年4月1日より/当館あてにお電話ください)
*当日制作した絵本は展示のためお預かりし、会期後に返却いたします



『チリとチリ よるのおはなし』アリス館、2021年

アーティスト・トーク「千葉いなか猫暮らし、ときどき絵本」

絵本作家・どいかやさんに、自作や暮らし方についてお話いただきます。

日時 | 4月26日(日) 10:30-12:00 会場 | まなびあテラス 講座室 定員 | 40名

*参加無料(要展覧会チケット) *要事前申込(2026年4月1日より/当館あてにお電話ください)

おしえて!「みんなのネコ&おすすめネコ本」

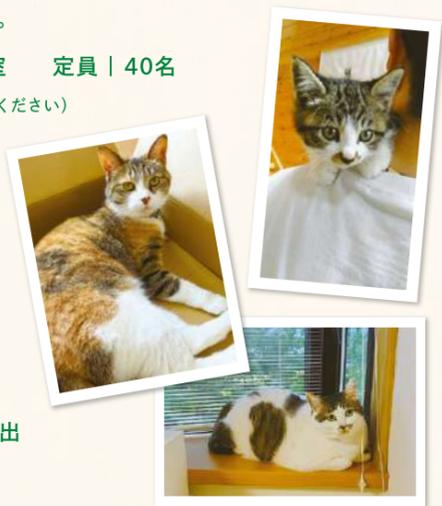
ご自身で撮影した自慢のネコ写真やおすすめのネコが登場する本を教えてください。本展会期中に館内で展示します。

募集内容 | おひとり様1枚まで(1枚に複数内容OK)

写真のサイズ | L版(8.9×12.7cm)以下

参加方法 | 館内の応募用紙に必要事項を記入・貼付し、専用BOXへ提出

*写真は当館や第三者が撮影し、SNSその他で発信される場合があります。
*応募内容は返却しません。また応募用紙は会期中貼り替える場合があります。



美術館×図書館「おはなし会にも、いつもネコ」

図書館恒例のおはなし会では、本展期間中、かならずネコにまつわる本が登場。

5月9日(土)、14日(木)、23日(土)、28日(木)、6月6日(土)、11日(木)、20日(土)

時間 | (木) 10:30- (土) 14:00- 会場 | 図書館内・おはなしの部屋 *参加無料・当日会場へお集まりください

協力 | 東根市図書館、読み聞かせサークル ひこうき雲、まなびあテラスサポーターズクラブ

ほかに、展覧会オリジナルグッズや出品作家の書籍を販売する会場限定ショップ、館内のブランジェリーカフェ「オイティ・マルジャン」とのコラボメニューなどさまざまな関連イベントを予定しております。

本展の最新情報は当館ホームページよりご確認ください。

東根市公益文化施設
まなびあテラス

〒999-3730
山形県東根市中央南1丁目7-3
TEL:0237-53-0229 FAX:0237-42-1296
<https://www.manabiaterrace.jp>

交通案内

[電車] JR奥羽本線・山形新幹線「さくらんぼ東根駅」下車 徒歩9分(約750m)

[車] (山形より)東北中央自動車道「東根I.C.」から東根市街へ約10分 (仙台より)国道48号線にて山形方面へ約1時間



猫でたどる
日本の
イラスト
レーション

まなびあテラス開館10周年記念

かたわら
には、
いつも
ネコ展

2026年4月25日(土) - 6月21日(日)

休館日 | 第2・第4月曜日 [4月27日(月)、5月11日(月)、5月25日(月)、6月8日(月)] 開館時間 | 10:00 - 18:00 (最終入場は17:30まで)

観覧料 | 一般800円、高校生以下無料 *各種障害者手帳(またはマイリD)を提示の方と付添者1名は入場無料 / 20名以上の団体は料金より100円引

東根市公益文化施設
まなびあテラス

主催 | まなびあテラス [東根市美術館] 共催 | 山形放送、NHKエンタープライズ中部
企画協力 | 刈谷市美術館 協力 | あかね書房、アリス館、イースト・プレス、若崎書店、WAVE出版、偕成社、
好字社、講談社、こぐま社、小峰書店、青幻舎、福音館書店、富山房、婦人之友社、復刊ドットコム、フレール館、
ブロンズ新社、理論社 後援 | 日本国際児童図書館協議会(JBBY)

猫 はわたしたちにとって、とても身近な動物で、古くから一緒に暮らしてきました。その愛らしい表情や動きだけではなく、気まぐれで自由、どこか高貴でミステリアスな雰囲気も猫ならではの魅力といえるでしょう。多くの人の心をとらえ続けている猫は、犬とならぶペットの代表格であり、子ども向けの雑誌や絵本などで早くから取りあげられてきました。その姿は個性的な主人公として、またある時は味のあるわき役として、さまざまな画家によって数多くの作品に描きだされてきました。

本展は、明治以降、子ども向けの雑誌や絵本などに登場してきた「猫」のイラストレーションに着目し、日本の絵本100年のあゆみをダイジェストにたどりつつ、今もあらたな創作が生みだされている「猫」絵本の多様な表現世界を紹介するものです。

第1部として、芸術的で教育的な絵雑誌の先駆けとなった明

第1部 1880年代から1940年代までの絵雑誌に見る、猫表現のうつり変わり

【出品作家(原画)】 北澤楽天、竹久夢二、岡本帰一、村山知義、深澤省三 (順不同)

1860年代から80年代には、江戸時代の絵草紙の流れをくんだ「赤本」や、欧文の「ちりめん本」が出版されていました。やがて、1904年に日本初の幼児向け絵雑誌『お伽絵解こども』(児童美育会)が創刊され、1906年には巖谷小波監修の『幼年画報』(博文館)が創刊されるなど、魅力的な表紙や口絵を取り入れた「絵雑誌」という新たなジャンルが誕生し、刊行が始まります。そうした絵雑誌には、シャルル・ペローの童話「長靴をはいた猫」の翻訳も紹介されました。

大正期には、子どもの個性や自我を尊重する児童中心主義の機運の高揚を背景として、『子供之友』(1914年創刊、婦人之友社)や『コードモノクニ』(1922年創刊、東京社)など、芸術性を追

求する絵雑誌が次々と発行され、絵雑誌の黄金時代を迎えます。こうした絵雑誌には、西洋絵画や日本画を学んだ画家たちが競い合うように登場し、やがて子どものための芸術としての「童画」が誕生します。戦争の時代に入ると、絵雑誌は衰退していきませんが、童画家たちの表現世界は戦後の画家たちにも受け継がれていきました。

そして、第2部では、せなけいこや田島征三をはじめとした1960年代から絵本を手がけてきた画家から、ささめやゆき、ミロコマチコ、きくちちき、どいかやなど、幅広い世代の画家たちが描いた絵本原画を紹介します。あわせて、制作過程が垣間見られる下絵やダミー本なども展示し、それぞれの画家の創作にも迫ります。画家たちが描いてきたさまざまな猫たち。愛でずにはいられない、その魅力を探ります。

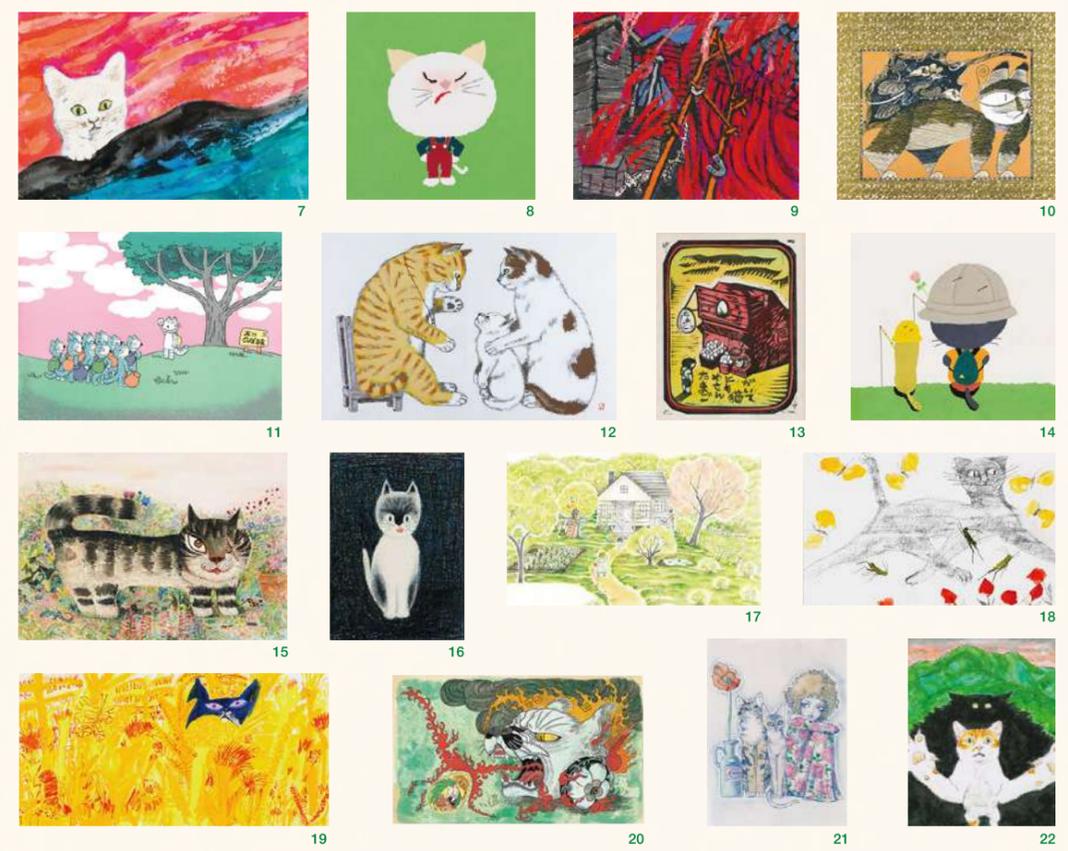
第1部では、ちりめん本『竹筧太郎』をはじめ、『お伽絵解こども』『幼年画報』などの絵雑誌に加え、日本の近代絵本史の幕開けを飾った『日本一画噺』の中から「ネコノセカイ」を紹介し、また、『子供之友』に登場した北澤楽天や岡本帰一らの貴重な原画も展示します。



1 ちりめん本『日本昔噺 竹筧太郎(SHIPPETTARO)』(長谷川武次郎、1888年) 個人蔵 2 『幼年画報』(1906年4月号、博文館) 個人蔵 3 北澤楽天『子供之友』(1916年7月号) 表紙原画 婦人之友社蔵 4 北澤楽天『ねこの子の行水』『子供之友』(1914年7月号) 原画 婦人之友社蔵 5 岡本帰一『いたずらコネコと洋服をなくしたアヒル』『子供之友』(1926年2月号) 原画 婦人之友社蔵 6 深澤省三『お猫さんの毛はやっとなの通りになります』『子供之友』(1934年3月号) 原画 婦人之友社蔵

猫でたどる日本のイラストレーション

7 朝倉撰『スイッチャねこ』原画 1971年 大佛次郎記念館蔵 ©Setsu Asakura 8 せなけいこ『ふうせんねこ』原画 1972年 ©Keiko Sena 9 田島征三『猫は生きている』原画 1973年 刈谷市美術館寄託 ©Seizo Tashima 10 瀬川康男『ふたり』リトグラフ 1981年 刈谷市美術館蔵 ©Yasuo Segawa 11 馬場のぼる『11びきのねこ ふくろのなか』リトグラフ 1982年 こくま社蔵 ©Noboru Baba 12 安泰『スイッチャねこ』原画 1975年 大佛次郎記念館蔵 ©Tai Yasu 13 井上洋介『ふりむけばねこ』関連木版画 1984年 刈谷市美術館蔵 ©Yosuke Inoue 14 村上康成『ふうた さかなつり』原画 1985年 ©Yasunari Murakami 15 片山健『タンゲくん』表紙・裏表紙原画 1992年 小さな絵本美術館寄託 ©Ken Katayama 16 ささめやゆき『ねこのチャッピー』表紙原画 2011年 ©Yuki Sasameya 17 どいかや『ハーニヤの庭で』原画 2007年 ©Kaya Doi 18 きくちちき『やまねこのおはなし』表紙原画 2012年 ©Chiki Kikuchi 19 ミロコマチコ『オレときいろ』表紙原画 2014年 ©mirocomachiko 20 石黒亜矢子『ばけねこぞろぞろ』原画 2015年 ©A.Ishiguro 21 宇野亞喜良『2ひきのねこ』表紙原画 2017年 ©AQUIRAX 22 五十嵐大介『ねこまがたけ』表紙原画 2023年 ©Daisuke Igarashi



第2部 1950年代から現在にいたる、さまざまな画家たちの猫絵本の原画を紹介

【出品作家(原画)】 朝倉撰、五十嵐大介、石黒亜矢子、井上洋介、宇野亞喜良、片山健、きくちちき、ささめやゆき、瀬川康男、せなけいこ、田島征三、どいかや、馬場のぼる、ミロコマチコ、村上康成、安泰 (50音順)

戦 後まもない時期から、子どもたちの心を満たそうと、絵本や雑誌が続々と刊行されました。1956年創刊の「こどものとも」(福音館書店)は、1冊1話の「月刊物語絵本」という画期的な企画でした。個性豊かな画家が描き手となったこのシリーズから、村山知義『おなかのかわ』や横内義『ちいさなねこ』なども誕生しました。日本の絵本の黄金期といわれる60年代から70年代には、せなけいこ『ふうせんねこ』や田島征三『猫は生きている』などが出版されました。そして、70年代の絵本ブームを経て、1980年代から90年代は、既成概念にとられない、個性的な表現が追求されました。瀬川康男『ふたり』や片山健『タンゲくん』もこの時期の代表的な猫絵本です。21世紀を迎え、アメリカ同時多発テロ事件(2001年)

や東日本大震災(2011年)に直面し、時代や社会を映し出すメディアである絵本には、平和や命、日常などのテーマが再認識されるようになりました。春夏秋冬が美しいどいかや『ハーニヤの庭で』や愛猫を描いたささめやゆき『ねこのチャッピー』、命が躍動するミロコマチコ『オレときいろ』も現代の猫絵本といえるでしょう。また、世界各地で起こる紛争や天災を背景に、「怖い」と向きあう新しい表現が生まれています。怪異を取りあげた石黒亜矢子『ばけねこぞろぞろ』や五十嵐大介『ねこまがたけ』は、猫絵本に新たな息吹をあたえています。第2部では、1950年代から現在にいたる世代を越えたさまざまな画家たちが手がけた、猫絵本のイラストレーション約350点を紹介します。